

現代の女流文学

編集 女流文学者会

4

佐多稲子

大庭みな子

三枝和子

芝木好子

阿部光子

畔柳二美

秋元松代

吉屋信子

毎日新聞社

流文学

4

佐多稲子

大庭みな子

三枝和子

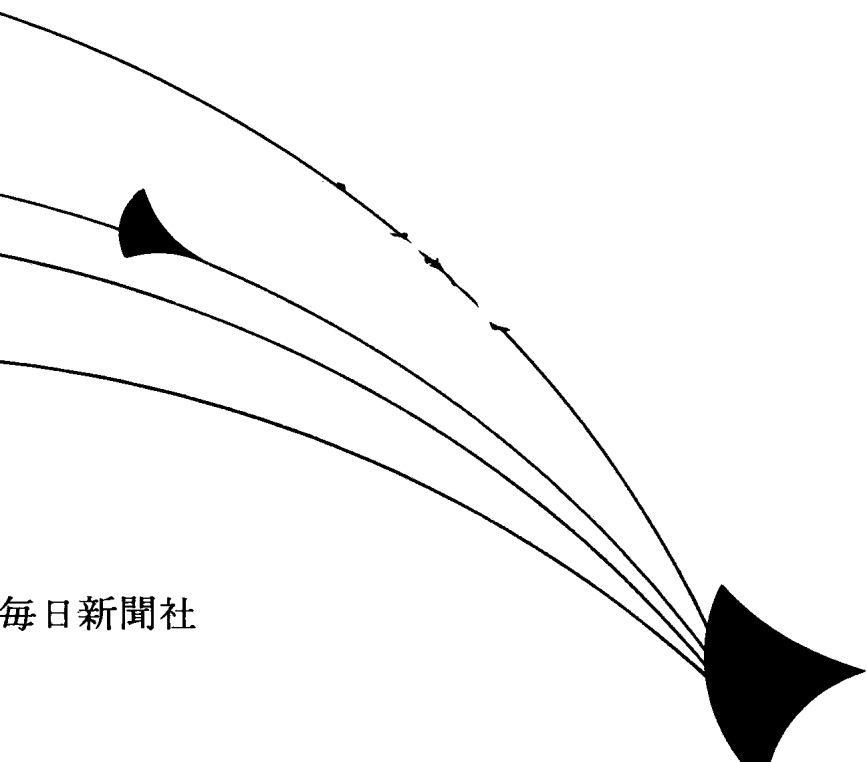
芝木好子

阿部光子

畔柳二美

秋元松代

吉屋信子



毎日新聞社

現代の女流文学 第四卷

定価 一二〇〇円

昭和四十九年十一月十日 印刷
昭和四十九年十一月二十日 発行

編集	女流文学者会
編集	円地文子
委員	佐多稲子

編集人 桑原隆次郎
発行人 朝居正彦
発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒四五〇 名古屋市中村区堀内町
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

図書印刷 大口製本

〈検印省略〉

現代の女流文学 4

目

次

佐多 稲子

私の東京地図 5

大庭 みな子

三匹の蟹 123

三枝 和子

月曜日の夜のこと 151

芝木 好子

湯 葉 167

阿部 光子

遅い目覚めながらも 221

畔 柳 二 美

限りなき困惑
247

秋 元 松 代

北越誌
277

吉 屋 信 子

鬼 火
303

底のぬけた柄杓
311

中 村 佐 喜 子

女流文学者の会のあゆみ 4
325

佐 々 木 基 一

解説 現実の稀薄と
凝集の二重構造
330

裴
慎
安東
澄

私の東京地図

佐多
稲子

佐多 稲子

明治三七（一九〇四）・六・一。長崎に生まれる。本名佐田イネ。大正四年、一家をあげて上京したが貧窮のため小学五年生で学業を廃し、キャラメル工場、しなそば屋、料亭、丸善書店などで働く。同十三年、結婚したがまもなく破綻。同人雑誌「驢馬」に拠る中野重治、堀辰雄らを知り、窪川鶴次郎と再婚。昭和三年、処女小説『キャラメル工場から』を発表。同四年、日本プロレタリア作家同盟に所屬、「働く婦人」編集委員として活動。弾圧の時代に『牡丹のある家』（同9）、「くれなゐ」（同13）、「素足の娘」（同15）などの代表作を書いた。同二〇年、離婚。翌年、婦人民主クラブ、新日本文学会等の中心となり積極的に働く。同二十三年三月よりいろいろの雑誌に「私の東京地図」を分載し、同二十三年五月完結。同三十八年、『女の宿』により第二回女流文学賞を受賞。同四七年『樹影』で第二五回野間文芸賞を受ける。

その他著書に、『佐多稲子作品集』全一五卷（同33・34）、『歯車』（同34）、『灰色の午后』（同35）、『溪流』（同39）、『塑像』（同41）、『重き流れに』（同45）などがある。

版 画

私の東京地図は、三十年の長きに亙って歩いてきた道の順に、心の紙に写されていったものだ。だから歳月とともに街の姿そのものが変わってゆき、私の心の地図は、名所案内の版画のように古めかしい景色であったり、白と黒とに光沢をもたせた芸術写真といったような風景であったりする。

この移りゆく風景の中を私が歩いている。まだ肉のつかぬ細い足で、東西も知らず歩き出している。次第に勝手がわかってきたときは、もう辺りはおもしろくなくて、うつむきがちに情性の足を引きずって通った。その情性に堪えかねて、知らぬ道にも踏みいり、袋小路に迷いぬいたこともある。ある時は、人に連れ立たれて、歩調を揃えて気負って歩いた道。

それらの東京の街は、あらかた焼け崩れた。焼けた東京の街に立って、私は私の地図を展げる。私の中に染みついてしまった地図は、私自身の姿だ。

吾妻橋のそばには、何故あんな大きな、松屋などという百貨店が建ってしまったのだろう。浅草のような庶民の街に、

こんな高層建築が建つと、建物そのものが威圧を感じさせるし、しかもそれが民衆の消費を狙って、恥かしげもなく子ども騙しの娯楽場を作ったり、町相応の安物をびらびらさせた馬鹿にされているような、そんな気がしたものだ。私の地図には、馬道の唐棧ばかり商う小さな呉服屋のあったのが写されている。中腰のガラス窓の棚に、藍色や茶色の唐棧のかざってあったのなどを、丹念に書きとめているのが私のくせである。花川戸の電車通りは、まだ高層建築などはない。同じような厚手の瓦屋根の並んだ間屋町だ。それもみんな薄暗い天井いっぱい、束ねた鼻緒の吊り下げである下駄の鼻緒屋ばかり。間口には広いガラス戸がたてあって、そのガラス戸には金文字で商店の名が書いてある。店の奥手の上櫃に、遠慮がちに斜めに腰をかけて、数えて渡される材料の麻の緒と布とを待っているのは小さな私である。内職の、鼻緒の前つぽ作りで幾ら貰っていたのかそれは覚えていない。電車道と大川べりとの間には、もうひとつ道があって、川べりは二階つくりのしもたやが、下町風の小されいさで川風を受けていた。その下を一銭蒸気が煙を吐いて、川面を這うようにして上下していた。川向うの橋ぎわに、ビール会社の建物もまだ無かったのである。枕橋を渡ると右手は、徳川さんの邸、左手には川へ突き出るようにして八百松があった。石畳のいつも水に濡れている門の内には、八百松と墨黒々に書いた出前仕出しのかつぎ籠が積んであって、朴歯をつっかけた

男衆が忙しそうに立ち働いているのがみえる。二階は広そうだ。同じようなてすりの窓障子がぐるりと川の上までまわっている。徳川さんの生垣に沿って隅田堤が先へつづいている。堤は勿論今日のようにアスファルトの隅田公園ではない。桜の木の手近かな、土手である。徳川邸をはずれると、片側も川の表面と同じくらいに低くなり、土手だけが一本道に高い。土手下へ降りる段々がところどころで下の道と土手とをつないでいる。すぐ向うに見える小屋が竹屋の渡し場、渡し銭を取る親爺が小屋の内に坐っている。丁度今、渡舟がこちらへ着くところ、船頭は櫓をおいて竹竿に持ちかえている。女たちが中腰に舟べりにつかまっている中で氣の良い男は脚をふんまえて身構えている。川の上にはいっぱい陽が当たっているが少し風が寒い。些細なものは川に吸い込まれて、川の大きさが静かに展がる。川向うでは、家がみんな一様にうしろ姿を見させている。

土手下は陽かげになり、どぶ板を前にした家は埃をかぶっている。駄菓子やと芋屋が一軒ずつ、ひっそりと店を出している。芋屋の店に、大ざるにふかし芋を並べて出しているのが、拭き上げたようにあざやかな紅梅色で、それだけが土手下にひとつの色彩をみせている。

その頃のある年、大雨が降って、隅田川の水嵩が危険なまでに高くなったことがあった。土手が切れるというので、町内は騒いだ。まっ暗な土手の上に高張提灯があちらこちらでゆれていて、とうとうと水の流れる音のおそろしかった記憶

がある。

もうとつぷりと日の暮れた寒い夕方、工場の帰りを雨に濡れてこの土手を使ったこともあった。小さな娘には、ただでさえ夜道の土手はこわかったのである。徳川さんの庭木の松のさし出た下を走って行った。

私の地図の、江戸案内の版画的風景には、三田神社も書かれている。いつもひっそりとしていた神社だ。淀んだどぶ池のそばに、閉めたままの障子の白さを見せていたのは、其角の家だ、と子ども心にも知っていた。もうこの辺りはすでに震災で一変している。このおそろしい当日は私は日本橋の勤め先から歩いて来て、吾妻橋を渡り、枕橋では家財を荷車に積んで逃げる人々を押し分けて行った。土手の土が大きく罅割れていたのを見た。この時から、隅田川の土手は、昔日のおもかげを消したのである。

私の住んでいた長屋はこの土手下の、かたかたとどぶ板を踏んでゆく路地奥にあったのだが、今はもう見当のつけようもない。向島小梅町と、美しい名の所だった。大川さんという、町内で名の知れた実業家の邸の裏手を、竹塀ぞいにうねうねと曲がっていた小路は、蛇横町を通り抜けて行けば、私もちょっとした間だけ通った牛島小学校がある。震災のあとでは、蛇横町などという古めかしい陰翳はこの町から消されて、近代都市大東京の労働者街に変っていたようだ。源森橋のあたりも業平から市内電車が入り込んでいて、トタン塀の工場が荒っぽい金ッけを撒いていた。

つい先頃、京成電車でこの通りを通ったが、赤ちゃけた蹠跡が電車の窓の両側に展がっていて、舗装道路の白く貫いて走っているのに街の名残りがあふばかりだった。あああれは曳舟川だ、と電車の窓をよぎる瞬間に見とめたこの川だけは、昔も今も変わらず、黒く淀んでいた。

版画の上に残った人物は、やっぱり景色の中にとけ込んで古めかしい。三開様の横手の、丁度其角堂に向って、どぶ池と道路とをへだてたところに、古ぼけた幼稚園があった。この幼稚園の二階は、その頃では珍らしくアパート式になっていて、一室一室に自炊の住人が暮らしていた。アパートなどと西洋風のこととは知らず、そのあたりの、間借り人の多い貧乏長屋からみれば、小ぢんまりと片づき、同宿の気兼ねもなく、何とハイカラなのだろうと羨ましく思ったことがある。ここの一室に石井さんという老夫婦が住んでいた。お婆さんの名をおせいさんという。おせいさんというのは、お爺さんがお婆さんと呼ぶ時に、おせい、おせい、と言うので私も知っていただけで、いつもは、石井さんと姓を呼ぶのであった。

おせいさんはもう、背は前こごみになってはいるものの、如何にも立派な大柄なひとであった。前へ差し出し気味の頭はときどき、ゆらゆらとゆれたけれども白髪を切り下げにして、ゆったりと垂れて、頬の色も白かったし、それを軽く締めている口もと品がよかった。この人が長い筭をさした片外しか何かに結って、打掛けの裾を引いて立った姿はさぞ

や似合って立派だったろう、と私は石井さんの顔をまじまじと見ながらよく心にその姿を思い描いたものだった。若い頃、本所に邸のあるさる大名の、奥女中をしていたという石井さんの身の上話が私にこの聯想をさせている。

そして今は、もう七十に手のとどくという年齢なのに、おかみさんや、娘にまじって内職の工場通いをしていた。その時分工場へ通って仕事をしても、女の仕事は内職と呼ぶ習慣があった。もっとも少女の私や石井さんのようなお婆さんのやる仕事は内職程度のもではあったけれど、その製品が立派に商品となっているのは事実である。

工場は幼稚園のすぐ裏側にあるメリヤス工場の裏側にあった。毛糸を洗う機械の音がガラガラガラとやかましくあたりに響いていた。毛糸を染めた赤黒い水はどぶ溝に流れている。その板塀の向う側はつり堀であったが、いつも何人かの閑人が、釣竿を下げて堀を囲んでいた。釣竿を上げると半ば上は、板塀の上に見えるのであった。

石井さんは安政の大地震の時にもう本所横網のお邸に上っていた。石井さんは品よく顔をしかめて首を振り、少し言葉に力を入れてそのときの恐ろしさを話した。丁度大震災の五、六年前である。その頃から、大地震がくる、という噂があり、予想も感じたりして、私たちは幾度も石井さんに安政のときの話を聞き出すのであった。

「それは、それは、もう、おそろしゅうござんしたよ。ごうつという地鳴りがしましてね、ただもう夢中でお互いに抱き

あつて揺られているうちに、どこかでどうつと土煙りが上つて家が倒れましてね。助けてくれえつ、という女の声もするし、もうもう生地獄の有様でござんしたわ」

石井さん夫婦の生活費は息子のところから送つてはくるのだったが、足りぬがちだったらしい。石井さんは女ばかりの仕事場で、よくお爺さんの話をした。石井さんは内職に来てゐるのにお爺さんは何もしないでゐる。

「氣位はつきり、今だに高くてね、うるさくて、うるさくて」

と、悪口の方が多いのだが、そういう話ぶりを聞き手の女たちはにやにやして、ときには娘をからかうように石井さんをはやし立てるのであった。

「おやまあ、そんなじゃアないんですよ」

と、胸を反らして打ち笑うときには、石井さん自身もはしやいでいた。

「お爺さんと一緒にゐるばかりにこうした暮らしをしななければなりませんのさ」

今はもう老人のことだから、石井さん夫婦の縁の成り立ちも遠い過去のこととして、みんなそのまますらりと承知しているが、ただそのことではみんなの胸のうちには、石井さんに対して気楽になる形で軽んじるものがあった。石井さんが、お爺さんと一緒にゐるばかりに苦勞をする、と言へば、

「いいじゃないの石井さん、好いた同士の共白髪でさ。羨ま

しいわよ」

と、はやす。

石井さん夫婦は、大分年をとつてからいっしょになつたものらしい。そのために石井さんは息子の家を出なければならなかつたのである。息子は相當の暮らしをしていて、お爺さんと別れさえすれば、いつでも母親を家に入れてやる、と言つてゐるそうであつたが、石井さんは息子の家の暮しを自慢して話す。けれどもまた「どうもね、嫁が甘やかす故^せが孫たちも我ままで困ります。私の言うことなんぞ利きやしません」と、あまり面白くない顔もするのであつた。

工場から家が近いし、お爺さんもゐることだし、お昼御飯には石井さんは幼稚園の二階へもどつてゆく。ときどき仕事の都合で石井さんの帰る時間のおくることがある。

すると、工場の仕事部屋の外に、

「おせい、おせい」

と、ひと言ごとに押えた老人の氣むずかしい声がある。

「そら、お爺さんがおむかえよ」

と、聞きつけた側のものが微笑をおくる。

「まあせつからねえ」と、頬をふくらした石井さんは、今度は撓^{しな}つた声で、

「はいいま、ゆきますよ」

と、答えて立ち上ると、その撓^{しな}つた声の余波で、新派芝居の娘の科白のように、

「では、行ってくるわね」

と、てすりにつかまりながら二階をおりてゆく。悪げのない好奇心で覗くと、並んでゆく二人連れの、お爺さんの方が背が低かった。

竹屋の渡しを渡ってゆけば、馬道から観音堂の裏手へ出て浅草へは早道なのであったが、私たちは一銭の渡し錢も惜しんで吾妻橋へ廻ってゆく。この頃の浅草の賑わいは、この節のように、といつてもここ数年來のことを言っているが、無趣味にただまっ黒な人の行列で埋まる雑^{ざつ}間とちがって、色も香もある、という表現はおかしいが、かき立てられた変調子ではあつても、人と人との声の聞き分けられる賑わいであつた。活動写真館の並ぶ六区へ入って行つてみても、この頃のように、むっと黙つて、大きな固い建物を取り囲んでいる人の群れではない。この頃では映画館の方も、観客に取り巻かれたまま、場内では映画が始まっているのかどうなのか、そしてこれから、おもしろくもなさそうな顔で待っている客たちに、切符を売るのかどうなのかさえ分らない。どっちも黙つて外^{そと}っぱを向き合っているようだ。空襲で周りの焼けてしまった六区では、映画館だけが残っているが、背景の厚みがないので撮^と影所のセツトのように見える。焼け跡の瓦礫^{がれき}の原を越して、仲見世の桃色の壁が、これもまたセツトのように見えていた。

昔の六区のとぎつい雰囲気は、次第にオペラ時代へと近代化していったが、初めて六区へ行つたときの、じいっと息を

つめて通るほどの強烈さは忘れられない。楽隊や囃^{はし}子が、鳴らすだけ鳴らせ、といったように乱調子に交錯している。頭の上はあくどい色彩の幟^{のぼり}で空も見えない。張りめぐらしたその幟には、大きな字で毒草と、活動写真の広告、看板には、誰かを祈り殺す丑の刻まいる、藁人形に呪いの五寸釘を打ち込む絵。しかも「毒草」はひとつの小屋だけではない。その時よっぽど当りのものとみえ、あちらも毒草こちらも毒草と、映画も芝居もこのおそろしい題をかがけて、人におそいかかっている。小屋ごとの入口では呼び込みが競争で、しお辛声を振り上げている。

パノラマ連鎖劇などというのも何かおそろしかった。舞台の背景画の上に、黄色に光った月が出て、その下を雲の流れでゆくのが不思議であつた。この連鎖劇の三友館の角を曲がると、ジャラン、ジャラン、と鐘が鳴る。メリー・ゴーラウンドの一回の終り。支那そばやだの六枚一組五十銭の早とり写真屋だの、オーギョーチという不思議な食べものやだのの並んだこの通りを田原町へ抜けると、ここには馬肉屋や牛めしやなどがごったな、油くさい臭いを街に撒きちらしている。

その油くさい臭いは、本願寺とそれを取り巻く周囲の寺や墓地にも流れ入っていたにちがいない。小さな寺の本堂が、牛めしやなどの角から入る路地の奥に見えているのである。

私の家の東京住いに仮りに頼む菩提^{ぼだい}寺も、このような路地の中にあつた。貧と過労のために死んでしまった若い叔父をここに葬つたのであつたが、専光寺というこの寺は、歌麿の若

提寺でもあった。このへんの寺は震災で焼けてからは、みんな郊外へ移されて、そのあとは、今の国際劇場の大通りとなり、通りだけは立派だが、たいへんな金をかけて作られたという国際劇場さえ、ごたごたとごみっぽい殺風景さで、街に軒を並べる商店は相変らず薄汚なかった。ここで幅を利かしているのは牛めしやと、腰かけの一品料理屋である。それも今度みんな焼けてしまったのであるが、急ごしらえのバラックはまた一品料理や、おでんの看板をかがげるにちがいない。つまりこは、浅草の含む泥くささと貧乏性との引受所みたいであるからだ。

私の家の菩提寺である専光寺が歌麿の菩提寺であるというのはあとで知ったことで、だから震災で焼ける前の歌麿の墓は見なかった。これを写した絵で見ると、墓といっても墓石はなくて、三四本の棕櫚しょうりの木の前に入入れの石がおいであるばかりである。引移った先の烏山の専光寺には、ささやかな場所を生垣で囲んだ中に、台石に北川と彫って、その上に観音像を浮き彫りにした石碑が立ててある。

田原町の路地の奥には専光寺の石の門があったが、私の記憶に専光寺の本堂はない。私の覚えていいるのは、庭の狭い普通の座敷であった。床の間には、やはり寺らしく仏壇があった香煙もあがっている。私は、そのかたわらの隅にぎよとして目を吸いつけられた。いくらか前へ首をさし出すようにして、すうっと立っている等身大の人形の、まっ青な顔。眉毛を剃りおとした、平たい面ざしは凄艶せいてんというのであろう。

胸もとをゆるく帯のあたりで合せて、藍地の羽織をきせてあったようにおもう。それは名優田之助のおもかげを写して作られた人形であった。鉛毒で死んだという田之助の話そのものが凄艶で、それは役者の最後らしくもあり、白粉に侵された昔の女形の凄まじさで、人形の顔の色の、まっ青であったのが、今も目の底に残っている。あの人形も、震災の劫火ごうかに巻かれてしまったのであるが、焼夷弾や爆弾に焼かれたのよりはこの人形らしい最後である。

私は浅草の、市民の遊び場らしい親しい健康な賑わいと可憐さを書きたいのであったのに、はからずも古めかしい暗さにすべってゆくようだ。田之助のまっ青な冷めたい顔がこわかったように、これも私の歩いた道べりでこわい思いで見えた話である。

この田原町のごたごたとした街には周旋屋の看板も相当の数であった。電車通りに庇いっぱいに大きく看板を張った周旋屋もあり、また、この奥に人の住む家があるともおもえぬ、家と家との間からひょっこりと人の出てくる路地がある。がたがたとどぶ板を踏んで入ると、その突き当りや、もひとつちよつと曲がったところなどに、ひっそりと、黒いのれんをかけた口入屋があったものだ。のれんをくぐって、がりりと戸を開けて入ると、一人の人間の坐るだけを棧で囲った帳場とがばがあって、色の黒い、多く泥くさい表情をした男が、めくら縞の銘仙か何かに、黒無地の前だれをかけて坐っていて、きまって、そのそばにくたびたいちよう返しの女などが煙草

を吸っていたりした。人の目にもつかぬ場所に、ちゃんと、こうした客がいるのが不思議なほどであったが、私もこのような口入屋から、六区の表通りの支那そばやへ周旋されていたのである。路地の奥は、ちゃんと表どおりへも通じているのである。

路地とどぶ板は、古い東京の宿命でもあろう。私の父の友達に、やっぱり家族を引つれて九州から東京へ移り住んでいる人がいた。どうして九州の勤め先をやめて東京へ来るようになったのかそれは私にはわからない。あのへんは何町といったのか、田原町から雷門へ向う電車通りのつまり電車道をはさんで片側は公園よりで食物屋などが多くて、その先には肉やのちんやがあったが、これの向い側は、仏具屋が多かった。大小の黒塗りの仏壇が、金箔の扉をひらいている。戒名のはいらぬ位牌もたくさんかざってある。鉦に敷く小ぶとんの、まっ赤な色と、うるしの黒と、金箔の黄とで妙な色調をなしている。

この仏具屋の並んだあたりを横町へ入ったところの、おきまりの路地の奥に、父の友達に住んでいた。私はこの松田という祖父の言葉を聞いていた私は、そんな目でこの人をじっと見ていたにちがいない。私がこの松田の家へ父に連れられて行った時、松田の母という人の九州言葉で挨拶をするのが、私の耳になつかしかった。東京の雑居の奥に住まわせられて、この田舎言葉の年寄り、毎日誰かと話すことがある

のだらうか、と、そんな気がするのには、私たちには田舎言葉も遠慮なく出せる気易さであらうに、こちらの顔もまともにみず、視線は伏せがちに、ぼそぼそと微笑さえ浮べないからであった。まだ老い込んだというほどでもない。髪こそ白かったが、腰がまだちゃんとしている。ぞろりと着物をはきていたが、背が高くみえる。頬の垂れた面長の顔の表情が無気力に暗かった。三つ四つの同じ位の兄弟の孫がこの年寄りの腰につきまといっている。子どもたちは着ぶくれて、何かしきりに食べているが、子供の生気がなくて無作法にあたりを散らしている。

松田は背のすうっと高い、顔立ちのとのつた男である。今は貧乏に荒んで、そのととのつた顔が却って凄い。定九郎にしては氣力が無い。与右衛門の汚れた色気、そんなものがあった。皮祢やバンドや、犬の首輪や、そんな皮製品の卸屋の番頭になって、それを売りさばいているのがその時の彼の仕事であった。私の父も勤め口が無くて、この商売に慣れないことをやろうとしていた。

「奥さんに逢うてきたかい」

「うん」

と、松田は、おもしろくもなさそうな顔で手酌で自分の盃に酒をついだ。父もそれ以上多く言わない。

松田は妻に逢うために千葉まで行って来たのである。松田の妻は千葉の遊廓へ身を沈めていた。何にも頼るものがない人間は、切羽つまった相談をもって、路地の奥の口入屋のの

れんをくぐる。自分の妻を金に換えた松田は、妻に逢うには、また妻の身体を金で購ねねばならなかった。こんな結果になったことを松田は初めに考えていたのであらうか。

「奥さんを女郎さんに売ったってね」

と、いつか私の祖母が顔をしかめて言ったのを私は聞いていたから、松田と父の話の意味もわかっていたのである。あきれたように顔をしかめて祖母の言うのを、父は気まずい顔で聞いている。

「口入屋に騙されたのさ」

と、松田をかばうように言った。

それから数ヵ月も経たなかった。松田が売上げの金を持ったらまた幾日も店へ帰らぬというので、卸屋の利けもののお婆さんが路地の中の松田の家へ来て、松田の母を相手に、歯切れのよい東京弁で聞きただしていることがあった。この瘦せたのお婆さんは苦勞人らしい思いやりもあるらしくて、

「ほんとうに困った人だね、あんたに苦勞をかけちゃ、あの人もすまないじゃないかねえ。こんな小さい子どもをおっ母さんに預けっぱなしでさ。どういう気だろう」

と、松田の母へは強くは言わなかった。松田の母は、息子の主人に言訳けをしたり、お愛想を言ったりすることの出来ぬ人だった。子供たちが客の持ち物に触ったりすると、それを自分で片づけなどしながら、相手の言うことにぼそぼそと答えるだけだった。

こういうことのあったあと、外から帰って来た父が寒気だ

った顔で言った。

「松田のおっ母さんが死んだ。猫いらずを呑んだらしい」

「どうしてまた」

私の祖母は身体こそ人並みよりも小さかったが、気の強い働きものだった。

「死ぬなんて！」

と、何かにむかって腹が立ってきたような顔をした。

「意気地がないねえ」

と、それを吐き捨てるようにさえた。いくじがない、と弾んだ調子で。

「松田は、どこへ行ったのか、また家に居らんのだよ」

近所の話によると、松田の母はこの数日、台所では米も炊かず、何かの買い食いですまし、そのあげくは二人の孫を連れて活動写真ばかり見に行っていた、ということだった。無気力なものは、路地の奥では、どぶ水のように淀んで腐ってゆくのであらうか。私は祖母といっしょに松田の家へ出かけていった。もう夕暮れで、吾妻橋のあたりは、仕事を終えて帰ってくる黒い人の姿であふれていた。隅田川の水が鈍く光っていた。橋ぎわの大きな広告塔で、仁丹のイルミネーションの明滅する度にそのあたりが明るくなったり暗くなったりしていた。ヤマニバーの扉は引きなりしに開けたてで、仕事着のままの客が出入りをしている。天ぷらやの店先からは油の煙も往来へ流れている。

「いらっしやいッ」「天井いっちょう」と、景気づける店の